

# 乳がんに対する意識と自己検診行動

黒谷 万美子  
愛知学泉大学

## The awareness of breast cancer and behavior towards self-examination

Mamiko Kurotani

キーワード: 乳がん検診 medical checkups for breast cancer, 自己検診 self-examination, 生活習慣 lifestyle, 食行動 eating behavior, 健康支援 health support

### 1. 問題及び目的

日本において悪性新生物は長年、死因別死亡率の1位を占めており2013年の死亡者数は、36万人を超えている。乳がんはその大部分が女性に発症し2011年の部位別罹患数では第1位である。また2013年の乳がん死亡数は男女合わせて13,230人と第5位を占め罹患率、死亡率ともに上昇傾向である<sup>1)</sup>。乳がんの危険因子として飲酒、肥満、運動不足、喫煙や閉経年齢、家族歴等が関与していると言われて<sup>2)</sup>が、寄与割合は1割程度との推計もあり<sup>3)</sup>1次予防の困難な疾患である。その為早期発見、早期治療による2次予防が重要であり、乳がん検診や自己検診の受診率、実施率を高めることが不可欠である。

がん対策基本法が2006年に制定され2012年新たな、がん対策推進基本計画が示されたがその中において、乳がん検診の受診率を5年以内に50%にすることが定められている<sup>4)</sup>。しかし、2013年の受診率(40~69歳女性)は34.2%と目標値には程遠い現状である<sup>5)</sup>。乳がんの症状として本人によるしこりの触知が8割以上を占める<sup>6)</sup>と言われ、乳がん発見状況としても自己発見が63.8%、検診が28.4%と自分で異常に気づき乳がんの発見に繋がっている<sup>7)</sup>。受診率を改善するため各自治体でのマンモグラフィ検診

無料クーポン券の配布や各種団体、民間での様々なピンクリボンキャンペーン活動などが行われているが、受診者の8割は繰り返し受診で初めての受診は2割という現状<sup>8)</sup>を見ると乳がん好発年齢以前の若い年代から、健康管理の一環として日頃から自分の乳房に関心を持ちケアをすることが必要ではないかと考える。

青年期は望ましい食生活を中心とした良い生活習慣の基礎を築く重要な時期である。若年期の生活習慣は壮年期、高齢期の生活習慣に連動し、メタボリックシンドロームに代表される生活習慣病や骨粗鬆症に影響を与えるのみならず、家庭を築き次の社会を担う世代として、生活習慣や健康に関する考え方はきわめて重要である<sup>9)</sup>。

そこで本研究では、今後の自己健康管理及び家族の健康管理に重要な役割を担うであろう青年期女性を対象に乳がん検診、自己検診についての意識や行動を明らかにし、健康教育を考える基礎資料とすることを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 調査対象

2 大学女子学生 283 名を対象に自記式アンケートを実施(回収率 91.8%)し、そのうちほとんど記入していないものを除く有効回答 251 名(有効回答率

88.7%)について分析した。

## (2) 調査期間

2014年7月～9月に実施した。

## (3) 調査内容

調査内容は主として次の項目からなっている。

- 1) 対象者の属性に関する項目(年齢、居住状況)
- 2) 乳がんに関する項目(知識、意識など)
- 3) 乳がん検診に関する項目(乳がん検診に対する意識、自己検診に対する意識)
- 4) 食行動に関する項目(情動的摂食、抑制的摂食、外発的摂食)

乳がんに対する意識と乳がん自己検診に対する意識は日本版 CHBMS(鈴木ら, 2013)<sup>10)</sup>を使用し、乳がん検診に対する意識は乳がん検診に対する態度(関ら, 2011)<sup>11)</sup>を使用し「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法で回答を求め1点から5点まで配した。食行動については DEBQ(The Dutch Eating Behavior Questionnaire)日本語修正版(加藤ら, 2009)<sup>12)</sup>を使用し「まったくそうでない」から「いつもそうである」までの5件法で回答を求め、1点から5点まで配した。

## (4) 倫理的配慮

調査実施に当たっては、本学倫理委員会にて倫理的に問題を有しないとの判断後、対象者には研究の主旨、プライバシーの保護について書面で説明し自由意志による協力を求めた。調査の参加の有無や成績による社会的、学業的不利が生じないことを記載し、協力の拒否の機会を保障した上で、情報管理に十分配慮し研究を行った。

## (5) 分析方法

乳がんに対する意識の乳がんへの罹患性、乳がんへの懸念についてそれぞれ5件法で回答を求め1点から5点を配し平均値を算出した。Cronbach の  $\alpha$  係数は、乳がんへの罹患性( $\alpha=0.80$ )、乳がんへの懸念( $\alpha=0.93$ )であった。

乳がんの自己検診に対する意識の自己検診の利益、自己検診に対する負担、自己検診の自己効力についてそれぞれ5件法で回答を求め1点から5点を配し平均値を算出した。Cronbach の  $\alpha$  係数は、自己検診の利益( $\alpha=0.74$ )、自己検診に対する負担( $\alpha=0.76$ )、自己検診の自己効力( $\alpha=0.91$ )であった。

乳がん検診に対する意識の受診前の障害、乳がん検診の重要性の低さ、受診時の障害、主観的規範についてそれぞれ5件法で回答を求め1点から5点を

配し平均値を算出した。Cronbach の  $\alpha$  係数は、受診前の障害( $\alpha=0.88$ )、乳がん検診の重要性の低さ( $\alpha=0.86$ )、受診時の障害( $\alpha=0.70$ )、主観的規範( $\alpha=0.83$ )であった。

食行動の情動的摂食、抑制的摂食、外発的摂食についてそれぞれ5件法で回答を求め1点から5点を配し平均値を算出した。Cronbach の  $\alpha$  係数は、情動的摂食( $\alpha=0.92$ )、抑制的摂食( $\alpha=0.87$ )、外発的摂食( $\alpha=0.78$ )であった。

統計解析には、SPSS19.0 for Windows を用い、検定は  $\chi^2$  検定、信頼性分析をし、信頼性の認められた尺度は尺度ごとに平均値と標準偏差を求め、t 検定、一元配置分散分析により比較検討した。有意水準は5%(両側検定)とした。

## 3. 結果

### (1) 対象者の属性

年齢:18歳 23人(9.3%)、19歳 64人(25.8%)、20歳 88人(35.5%)、21歳 61人(24.6%)、22歳以上 12人(4.8%)

居住状況:1人暮らし 38人(16.2%)、家族と同居 187人(79.9%)、寮・合宿所等 9人(3.9%)

### (2) 乳がんについて

乳がんについてみた結果、表1の通り乳がんについて知っている者は、238名(95.2%)とほとんどを占めたがマンモグラフィについて知っている者は91名(36.4%)、乳がん自己検診を知っている者は75名(30.0%)、マンモグラフィ受診経験者4名(1.6%)、自己検診経験者6名(2.0%)、自己検診を行いたい者は181名(73.9%)であった。

表1.乳がんについて

乳がんについて	n	
	はい	いいえ
乳がんの事を知っている	238	12
マンモグラフィ検査を知っている	91	159
乳がん自己検診を知っている	75	175
マンモグラフィ検査受診経験がある	4	245
乳がん自己検診経験がある	6	244
医師の視触診経験がある	5	245
乳がん自己検診を行いたい	181	64

### (3) 乳がんに対する意識

乳がんに対する意識をみた結果、図1の通り乳がんへの罹患性で最も多かった項目は、「乳がんが発症

する可能性が心配」44.2%（「とてもそう思う」が6.7%、「少しそう思う」が37.5%）、次に「乳がんにかかる気がする」28.8%（「とてもそう思う」が2.9%、「少しそう思う」が25.9%）であった。

乳がんへの懸念で最も多かった項目は、「乳がんを考えると怖い」65.4%（「とてもそう思う」が20.8%、「少しそう思う」が44.6%）、次に「乳がんを考えると心配」60.0%（「とてもそう思う」が16.7%、「少しそう思う」が43.3%）であった。

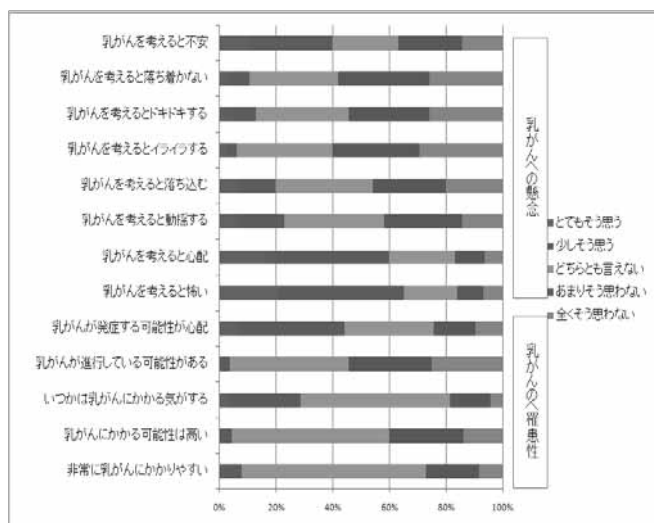


図1.乳がんに対する意識

(4) 乳がん自己検診に対する意識

乳がんの自己検診に対する意識についてみた結果、図2の通り自己検診の利益で最も多かった項目は、「自己検診は乳房のしこり早期発見に役立つ」85.9%（「とてもそう思う」が38.8%、「少しそう思う」が47.1%）、次に「自己検診は自己の健康管理をしていること」80.5%（「とてもそう思う」が26.0%、「少しそう思う」が54.5%）であった。

自己検診に対する負担で最も多かった項目は、「自己検診を正確に行えるとは思えない」58.7%（「とてもそう思う」が15.7%、「少しそう思う」が43.0%）、次に「自己検診を行うのを忘れてしまう」41.5%（「とてもそう思う」が7.9%、「少しそう思う」が33.6%）であった。

自己検診の自己効力で最も多かった項目は、「自己検診で乳房のしこりを見つけることができる」8.7%（「とてもそう思う」が0.4%、「少しそう思う」が8.3%）と非常に低く、中でも低値であったのは「自己検診時正しく指を使える」が1.3%（「とてもそう

思う」が0%、「少しそう思う」が1.3%）であった。

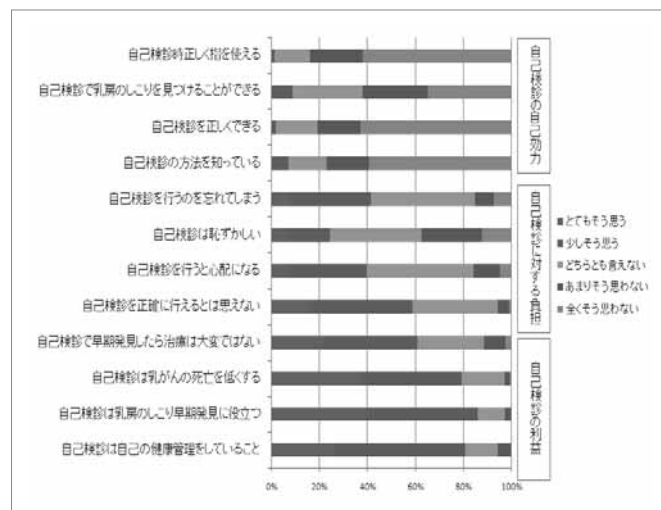


図2.乳がん自己検診に対する意識

(5) 乳がん検診に対する意識

乳がん検診に対する意識をみた結果、図3の通り受診前の障害で最も多かった項目は、「予約に手間がかかるため受診が難しい」31.5%（「とてもそう思う」が4.4%、「少しそう思う」が27.1%）、次に「検診機関の時間が不便で受診が難しい」31.5%（「とてもそう思う」が3.1%、「少しそう思う」が28.4%）であった。

乳がん検診の重要性の低さで最も多かった項目は、「必要時受診できる為必要性を感じない」10.0%（「とてもそう思う」が1.3%、「少しそう思う」が8.7%）と低く、中でも低値であったのは、「検診受診は他の健康問題より重要でない」3.1%（「とてもそう思う」が0%、「少しそう思う」が3.1%）であった。

受診時の障害で最も多かった項目は、「受診して乳がんが見つかったら怖い」68.6%（「とてもそう思う」が23.6%、「少しそう思う」が45.0%）、次に「検診を行うのが男性医師だと受診したくない」66.3%（「とてもそう思う」が31.4%、「少しそう思う」が34.9%）であった。

主観的規範で最も多かった項目は、「家族から受診を勧められている」17.0%（「とてもそう思う」が3.5%、「少しそう思う」が13.5%）、次に「友人・知人から受診を勧められている」10.0%（「とてもそう思う」が1.7%、「少しそう思う」が8.3%）であった。

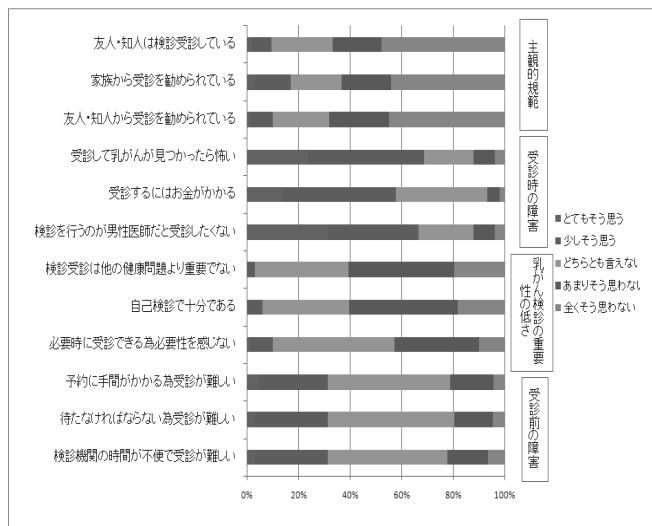


図 3.乳がん検診に対する意識

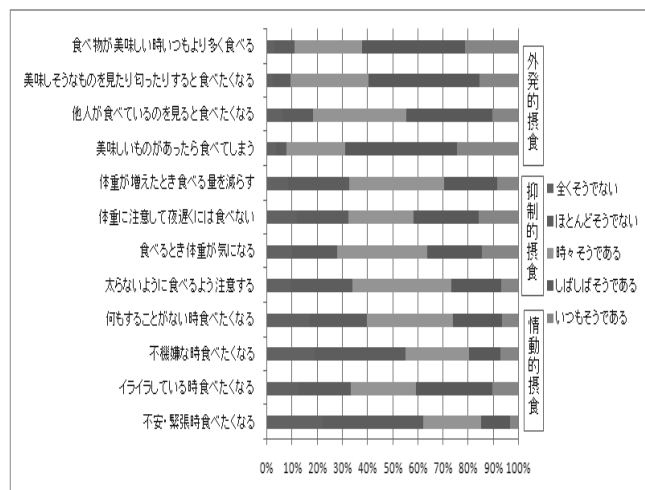


図 4.食行動

(6) 食行動について

食行動についてみた結果、図 4 の通り情動的摂食で最も多かった項目は、「イライラしている時食べたくなる」40.8%（「いつもそうである」が 10.4%、「しばしばそうである」が 30.4%）、次に「何もすることがない時食べたくなる」25.9%（「いつもそうである」が 6.4%、「しばしばそうである」が 19.5%）、「不機嫌な時食べたくなる」19.6%（「いつもそうである」が 7.2%、「しばしばそうである」が 12.4%）であった。

抑制的摂食で最も多かった項目は、「体重に注意して夜遅くには食べない」42.2%（「いつもそうである」が 15.5%、「しばしばそうである」が 26.7%）、次に「食べる時体重が気になる」36.2%（「いつもそうである」が 14.3%、「しばしばそうである」が 21.9%）、「太らないように食べるように注意する」26.7%（「いつもそうである」が 6.8%、「しばしばそうである」が 19.9%）であった。

外発的摂食で最も多かった項目は、「美味しいものがあつたら食べてしまう」68.8%（「いつもそうである」が 24.4%、「しばしばそうである」が 44.4%）、次に「食べ物が美味しい時いつもより多く食べる」62.1%（「いつもそうである」が 21.1%、「しばしばそうである」が 41.0%）、「美味しそうな物を見たり匂ったりすると食べたくなる」59.7%（「いつもそうである」が 15.5%、「しばしばそうである」が 44.2%）であった。

(7) 諸尺度について

1) 食行動別諸尺度

食行動(情動的摂食・抑制的摂食・外発的摂食)3群(低群・中群・高群)別に乳がんに対する意識、乳がん自己検診に対する意識、乳がん検診に対する意識をみた結果表 2 の通り、自己検診に対する負担(p<.01)において情動的摂食高群の者が高値であり、受診時の障害(p<.05)において外発的摂食高群の者が低値であった。

表 2.食行動別諸尺度

	情動的摂食			抑制的摂食			外発的摂食		
	低群	中群	高群	低群	中群	高群	低群	中群	高群
乳がんへの罹患性	n 72	70	77	51	88	95	77	80	77
平均値	2.72	2.83	2.71	2.77	2.82	2.72	2.80	2.71	2.79
SD	0.62	0.58	0.74	0.66	0.64	0.66	0.65	0.60	0.70
F値	0.68			0.47			0.46		
乳がんへの懸念	n 72	69	78	51	87	96	77	80	77
平均値	2.70	2.81	2.81	2.66	2.83	2.83	2.80	2.68	2.88
SD	0.96	0.83	0.90	1.00	0.89	0.83	0.86	0.79	1.03
F値	0.41			0.77			0.92		
自己検診の利益	n 72	72	78	53	87	96	77	82	77
平均値	4.10	3.97	3.95	3.88	4.01	4.08	3.89	4.07	4.07
SD	0.64	0.60	0.68	0.78	0.59	0.60	0.68	0.54	0.69
F値	1.10			1.81			2.08		
自己検診に対する負担	n 72	71	76	52	87	95	76	81	77
平均値	2.71	2.92	2.95	2.81	2.89	2.86	2.85	2.94	2.77
SD	0.55	0.43	0.52	0.57	0.53	0.41	0.44	0.44	0.60
F値	4.83**			0.41			2.36		
自己検診の自己効力	n 71	71	75	53	86	93	76	80	76
平均値	1.80	1.73	1.83	1.77	1.83	1.73	1.80	1.83	1.70
SD	0.70	0.66	0.66	0.69	0.71	0.61	0.70	0.71	0.60
F値	0.38			0.53			0.77		
受診前の障害	n 69	68	72	51	81	91	70	78	75
平均値	3.02	3.07	3.00	3.00	3.13	2.93	2.96	3.10	3.02
SD	0.81	0.73	0.77	0.75	0.70	0.78	0.75	0.73	0.80
F値	0.17			1.67			0.68		
乳がん検診の重要性の低さ	n 69	69	72	51	82	91	71	78	75
平均値	2.20	2.37	2.48	2.47	2.32	2.39	2.31	2.42	2.36
SD	0.71	0.62	0.71	0.72	0.60	0.75	0.74	0.60	0.73
F値	2.98			0.78			0.47		
受診時の障害	n 69	69	72	50	82	91	71	78	74
平均値	3.54	3.62	3.55	3.45	3.59	3.62	3.52	3.73	3.45
SD	0.82	0.65	0.72	0.90	0.69	0.67	0.78	0.61	0.77
F値	0.25			0.93			3.12*		
主観的規範	n 69	69	72	51	82	91	71	78	75
平均値	1.79	1.94	2.06	1.83	2.02	1.93	1.10	1.96	1.91
SD	0.86	0.88	0.89	0.87	0.93	0.86	0.83	0.90	0.92
F値	1.66			0.72			0.08		

\* p<.05 \*\* p<.01

2) 検診知識・検診受診希望別諸尺度

乳がん検診知識の有無別に乳がんに対する意識、乳がん自己検診に対する意識、乳がん検診に対する意識、食行動をみた結果表3の通り、自己検診の自己効力(p<.001)において知識有りの者が高値であり情動的摂食(p<.05)において知識有りの者が低値であった。同様に自己検診知識の有無別に乳がんに対する意識、乳がん自己検診に対する意識、乳がん検診に対する意識、食行動をみた結果、自己検診の自己効力(p<.001)において知識有りの者が高値であった。検診受診希望の有無別に乳がんに対する意識、乳がん自己検診に対する意識、乳がん検診に対する意識、食行動をみた結果、乳がんへの懸念(p<.01)、自己検診の利益(p<.05)、乳がん検診の重要性の低さ(p<.05)、受診時の障害(p<.01)、主観的規範(p<.01)において差が認められ、乳がん検診の重要性の低さと受診時の障害以外は検診受診希望有りの者が高値であった。同様に自己検診希望の有無別に乳がんに対する意識、乳がん自己検診に対する意識、乳がん検診に対する意識、食行動をみた結果、乳がんへの懸念(p<.01)、乳がんへの懸念(p<.05)、自己検診の利益(p<.01)、乳がん検診の重要性の低さ(p<.05)、抑制的摂食(p<.05)において差が認められ、自己検診希望有りの者が乳がん検診の重要性の低さ以外高値であった。

4. 考察

(1) 乳がんについての知識

乳がんについて知っていると感じた者は 95.2%であったが、マンモグラフィ検査を知っている者は 36.4%、自己検診を知っている者は 30.0%と認知度が低かった。更にマンモグラフィ検査の受診経験がある者は 1.6%、自己検診の経験がある者は 2.4%と非常に低値であった。自己検診の経験者は赤羽<sup>13)</sup>の看護女子学生を対象とした研究では 63.9%、同じく日下<sup>14)</sup>らの看護女子学生を対象の研究では 14.9%と本研究より高値であった。これは医療系大学のカリキュラムにおいての健康や病気についての学習による効果とも考えられる。欧米では青年期女性に対する乳房疾患での教育において、乳房自己検診が指導されることにより、教育効果が表れているとの報告<sup>15)</sup>もあり、青年期からの自己健康管理教育の一環として、乳房検診教育が重要であると考えられる。

表 3.検診知識・検診受診希望別諸尺度

	乳がん検診知識		自己検診知識		検診受診希望		自己検診希望	
	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し
乳がんへの罹患性	n 87	151	72	166	96	55	179	56
平均値	2.69	2.80	2.72	2.78	2.81	2.59	2.83	2.53
SD	0.64	0.66	0.65	0.66	0.67	0.74	0.60	0.76
t値orF値	1.21		0.66		1.91		2.68**	
乳がんへの懸念	n 86	152	71	167	95	55	179	56
平均値	2.69	2.84	2.74	2.81	2.95	2.50	2.87	2.52
SD	0.89	0.89	0.85	0.91	0.90	0.96	0.86	0.92
t値orF値	1.29		0.49		2.85**		2.6*	
自己検診の利益	n 86	154	72	168	99	55	180	57
平均値	4.10	3.95	4.13	3.95	4.17	3.91	4.08	3.79
SD	0.61	0.66	0.58	0.66	0.61	0.67	0.57	0.80
t値orF値	1.69		1.96		2.51*		2.94**	
自己検診に対する負担	n 86	152	72	166	99	54	178	57
平均値	2.91	2.83	2.81	2.88	2.85	2.78	2.85	2.86
SD	0.47	0.51	0.48	0.51	0.46	0.69	0.40	0.73
t値orF値	1.25		0.93		0.77		0.11	
自己検診の自己効力	n 82	154	69	167	98	54	177	56
平均値	2.01	1.65	2.04	1.67	1.77	1.69	1.74	1.85
SD	0.73	0.60	0.74	0.61	0.66	0.70	0.65	0.74
t値orF値	3.82**		3.99**		0.73		1.05	
受診前の障害	n 79	149	66	162	95	50	173	51
平均値	2.97	3.04	2.98	3.04	2.91	3.15	2.98	3.15
SD	0.79	0.75	0.81	0.70	0.83	0.81	0.78	0.72
t値orF値	0.64		0.53		1.65		1.38	
乳がん検診の重要性の低さ	n 79	150	66	163	96	50	174	51
平均値	2.27	2.42	2.24	2.42	2.23	2.53	2.28	2.64
SD	0.72	0.68	0.74	0.67	0.73	0.76	0.67	0.72
t値orF値	1.58		1.75		2.35*		3.36**	
受診時の障害	n 79	149	66	162	96	50	174	50
平均値	3.56	3.58	3.54	3.58	3.44	3.66	3.55	3.68
SD	0.79	0.70	0.82	0.69	0.78	0.63	0.76	0.61
t値orF値	0.19		0.42		3.26**		1.11	
主観的規範	n 79	150	66	163	96	50	174	51
平均値	1.98	1.92	2.06	1.89	2.02	1.64	1.95	1.83
SD	0.89	0.88	0.94	0.86	0.94	0.74	0.87	0.91
t値orF値	0.53		1.34		2.64**		0.83	
情動的摂食	n 90	150	75	165	96	56	173	62
平均値	2.07	2.28	2.24	2.18	2.10	2.34	2.16	2.31
SD	0.70	0.72	0.78	0.70	0.73	0.75	0.72	0.67
t値orF値	2.19*		0.52		1.92		1.46	
抑制的摂食	n 89	156	73	172	97	56	177	63
平均値	2.72	2.88	2.78	2.84	2.78	2.82	2.87	2.64
SD	0.76	0.69	0.78	0.69	0.73	0.66	0.71	0.67
t値orF値	1.64		0.64		0.29		2.23*	
外発的摂食	n 89	156	73	172	97	57	179	63
平均値	3.11	3.27	3.20	3.22	3.25	3.31	3.21	3.22
SD	0.56	0.62	0.62	0.60	0.65	0.60	0.60	0.59
t値orF値	1.93		0.22		0.51		0.12	

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

(2) 乳がん・乳がん検診・自己検診に対する認識

乳がんに対する認識についてみた結果、最も多かったのは乳がんへの懸念の項目である乳がんのことを考えると怖いのが 65.4%であった。乳がん検診に対する認識をみた結果、最も多かったのは受診時の障害の項目である乳がん検診でがんが見つかったら怖いのが 68.6%であった。乳がん自己検診についてみた結果、最も多かったのは自己検診の利益の項目である自己検診を行うことはしこりの早期発見に役立つのが 85.9%であった。しかし、自己検診の自己効力に関しては非常に低く自己検診を正しくできる者は 1.7%であった。一方、マンモグラフィ検査を受診したい者は 39.7%、自己検診をしたい者は 73.9%であった。鈴木ら<sup>16)</sup>の成人女性(平均年齢 45.6 歳)を対象とした研究においても乳がんに対する認識では乳がんのことを考えると怖いのが 69.5%、自己検診の利益の項目である自己検診を行うことはしこりの早期発

見に役立つが 90.7%と高く、今回の結果とほぼ同様であったが、自己検診の自己効力に関しては、自己検診を正しくできる者は 16.4%と違いが見られた。野末ら<sup>17)</sup>や水木<sup>18)</sup>の研究において自己検診をしていない理由として正しい方法が分からないという実施方法の問題であったという結果からも、自己効力を高めることが自己検診を行うことに繋がるものと思われる。自己検診を行うための知識はもとより実際の実技的方法を取り入れた教育が必要である。

乳がん検診の意識の中で受診時の障害である受診して乳がんが見つかったら怖いが 68.6%、検診を行うのが男性医師だと受診したくないが 66.3%と高値であったことから、乳がんへの恐怖心を抱くことなく受診に結び付くような予防教育とともに、性差に配慮した女性スタッフの確保が求められる。

### (3) 乳がん検診、自己検診受診希望と意識

乳がん検診受診希望、自己検診希望と意識(乳がん・自己検診・乳がん検診)についてみた結果、特に関連が認められたのは、乳がんに対する意識の乳がんへの懸念、自己検診に対する意識の自己検診の利益、乳がん検診に対する意識の乳がん検診の重要性の低さであった。乳がん検診や自己検診の重要性を認識することが不可欠である。今回の研究において食行動において抑制的摂食との関連が認められたが、食を中心とした生活習慣との関連が示唆された研究<sup>19)</sup>もあり、今後の検討課題としたい。

## 引用文献

- 1) 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター:最新がん統計,[http://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 2) 津金昌一郎:乳がんのリスクと予防—疫学的観点から,日本乳癌検診学会誌,19(1),4-14(2010)
- 3) 金子耕司,佐藤信昭,土田純子他:乳がん検診の現状,新潟県立がんセンター病院医誌,54(1),32-38(2015)
- 4) 厚生労働省:がん対策推進基本計画の概要,[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan\\_keiku01.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keiku01.pdf)
- 5) 1)前掲
- 6) 霞富士雄:乳がんの早期発見と最新治療及び長期予後について,日本保険医学会誌,102(2),156-167(2004)
- 7) 日本乳癌学会:全国乳がん患者登録調査報告,日本乳癌学会(2010)
- 8) 土井卓子,井上謙一,合田杏子他:乳がん検診啓発のための大学生への講義の意義と検討,日本がん検診・診断学会誌,19(2),169-174(2011)
- 9) 黒谷万美子:ライフスタイルと学習意欲,愛知学泉大学・短期大学紀要,49,49-55(2014)
- 10) 関愛子,平井啓,長塚美和他:乳がん検診に対する態度の測定,厚生指標,58(2),14-20(2011)
- 11) 鈴木久美,林直子,樺沢三奈子他:成人女性の乳がんおよび乳がん検診・自己検診に対する意識調査,保健の科学,55(1),63-70(2013)
- 12) 加藤桂子,ロズイット ロト:日本の大学生とオーストラリアの大学生の食行動の相違,安田女子大学紀要,37,209-220(2009)
- 13) 赤羽由美:青年後期女性の乳房自己検診行動と知識,日本看護学会論文集 地域看護 40,151-153(2009)
- 14) 日下知子,渡邊有紀:青年後期女性の乳房自己検診行動を妨げる要因—看護学生を対象として—,川崎医療短期大学紀要,31,15-20(2011)
- 15) 黒田裕子,末原紀美代:青年期女性の乳房セルフケアに関する行動と知識,母性衛生,47(2),397-405(2006)
- 16) 11)前掲
- 17) 野末悦子,島田菜穂子,沢井清司他:一般女性の乳癌意識と自己検診実態—乳房健康研究会のアンケート調査から—,日乳癌検診学会誌,13(3),249-257(2004)
- 18) 水木暢子,日景真由美,木村千代子他:A市における乳がん検診受診状況と乳房自己検診に対する意識,日本看護学会論文集 地域看護 37,152-154(2006)
- 19) 岩成治:乳がんは増えているか,疫学と発生,臨床婦人科産科,55(4),333-338(2001)